

資料 1-12：水谷 和郎（神戸百年記念病院（阪神淡路大震災 淡路病院当直医））

阪神・淡路大震災の時は、医師 3 年目、震災当日兵庫県立淡路病院の内科当直医でした（父は神戸市立西市民病院の薬剤部長、叔父は国立神戸病院院長という環境でした）。

その後、兵庫県立姫路循環器病センター循環器内科で勤務しておりましたが、震災 10 年目の 1 月 17 日、循環器のあるスタッフが、決して悪気はなく、「震災があっても、うちの病院は頭と心臓の病院なので、誰も来ない」といった発言がきっかけとなり災害医療の啓蒙活動に携わることになりました。

震災当日、兵庫県立淡路病院の記録を残す必要があるとして、当時の松田外科部長の発案で、外科・栗栖先生が医療現場のビデオを撮影されました。震災当日に医療者が医療現場を撮影したビデオは恐らく淡路病院のものしか存在しないだろうと思います。内容的には、今でこそ誰もが言葉を知っている「トリアージ」が実際に行われているビデオで、そのビデオを用いて、姫路循環器病センターの災害医療に対する院内啓蒙活動から始めました。ビデオをみることで災害医療の現実を疑似体験してもらい、次の災害に対して、少しでも被害が少なくてすむよう、活動は細々としていますが口コミで依頼をいただければ、全国でお話をさせていただいています。

今回の研究会で本来はその話をする予定でしたが、東日本大震災のために主題が変更、DMAT のことについての見聞を書かせていただきました。この研究会に参加の方は DMAT をご存知だと思いますが、DMAT と日赤 DMAT との明確な違いまでご存知の方は少ないかもしれません（図表¹）。今回、私は東日本大震災の被災地入りはできませんでしたので、実際に現場活動をされた長岡赤十字病院の内藤万砂文先生と、長崎大学救急部の山下和範先生にご意見をいただきました。内藤先生は新潟の地震で被災されており、なおかつ今回も真っ先に駆け付けられたということで、被災経験から今回の震災について思うことが多く



1 日赤DMATによるミーティング

あったようです。この点につきましては、是非内藤先生の資料をご参考ください。

兵庫県としては、兵庫 DMAT が伊丹空港から花巻へ向かいました。(図表²) しかし、その SCU (Staging Care Unit) には、いわゆるトリアージタグにおける赤、黄色の方がほとんどおらず、黒か緑の方が被災現場から搬送されたりしており、予想を下回る傷病者数であったようです。姫路循環器病センターからも DMAT が 1 チーム行かせていただいたのですが、装備や携行品でチーム間の差が大きく、なかなか思うような医療活動ができなかったそうです。その後、DMAT として現地より帰って来られたある医師は、一生懸命行って頑張ったのに、何もできなかったという思いが強く、すぐに涙がでてくるような状況に陥ったと聞いています。

兵庫 DMAT など地方自治体の DMAT に関しては、厚生労働省よりの命令があれば派遣されます。しかし、被災現場に赴いた時に統括 DMAT などのコーディネートがスムーズにすすまないと、仕事の需要と供給のバランスがとれません。今回、特にそれが顕著であったのは、交通手段であり、現地での細かな交通手段を持つチームはそれぞれで与えられた現場入りができ活動できているのですが、コーディネートが上手くいかないケースでは残念ながらより必要な現場入りができず十分な活動ができなかったようです。その点、今回、日赤 DMAT に関しては、もともと日本赤十字社が全国組織であることが大きく、各地の日赤 DMAT チームが移動に必要な車両を保有しているので、容易に現場入りでき、その後も仕事の分担がより効率的にできたのではないかと思います。

また、DMAT は基本的に発災から 48 時間の瓦礫の下の医療を目的に発足したチームですが、日赤 DMAT に関しては超急性期以後の救護班としての活動も内容に含まれています。そのあたりが今回の震災に対しては、直下型地震と違い、津波被害が大きかったことから、日本 DMAT と日赤 DMAT の差がついてしまったのではないかという印象があります。

今でも自分がすぐに現地入りできなかったことが悔やまれますが、正直、現地入りして



² 広域搬送を担当するDMAT隊員

も何ができたかは分かりません。今回の東日本大震災の被災地で唯一、水戸済生会病院だけは震災前に講演に行かせていただくチャンスがあり、淡路病院のビデオを見ていただきました。震災後、水戸済生会の医師やスタッフの方から、ビデオで阪神淡路大震災の時の淡路病院の混乱ぶりを一度見ていたために、発災後に起きることがある程度予想され、落ち着いて考えることができ、スタッフの動きがスムーズだったと伺いました。この活動をしていて本当に心底から良かったと思いました。これからも阪神淡路大震災で得られた教訓を、風化させることなく、淡路病院のビデオと共に伝えていきたいと思います。